

い。読者の誤解のないよう確認すると、評者の論評には、本書の本来の関心事ではない内容も多い。本書が描く具体的に奥行きある中世社会像と豊富に提供される情報から、様々な示唆や刺激を受けつつ、ないものねだりを述べたにすぎない。他にも本書には多くのヒントを得た。紙幅が尽き具体的に触れられないが、「伝説の形成には必ずそれを生み出す背景」があり「それを受容する社会の意識にも注意を払うべき」（二四一頁）との提言と、各章で説話・伝承の成立事情を見事に読み解く手法には特に学んだ。なお、説話の世界で知られる日蔵の入唐譚への言及なども含む本書の説話分析は、文学研究者にも裨益するところが多いだろう。付言すれば、仏教関連の物・知を論じる第II部は、具体的情報と考察方法の両面から、美術史・建築史・考古学などの多分野の研究者にも有益である。本書が歴史学者以外に広く利用されることを望む。

本書と並行して、中世仏教の構造的理解においても、著者は前書を発展させ、さらなる高みに達している（「日本中世における仏教宗派の共存と対立」『史潮』八二、二〇一七など）。近い将来、著者の諸研究が総合され、新たな中世社会像が描かれることを期待したい。

（二〇一七年二月刊、吉川弘文館、三四八頁、一一〇〇〇円＋税）

原田正俊編

## 『宗教と儀礼の東アジア』

——交錯する儒教・仏教・道教——

芳澤 元

### はじめに

勉強出版おなじみのシリーズとして、日本史学界でも定着しつつある『アジア遊学』二〇六号の企画は、儒・仏・道の三教がテーマである。いずれも東アジア世界に特徴的な、重要な構成要素であり、それだけに日本史学においても、社会秩序やイデオロギーを理解する際には無視することはできない。一方、日本仏教ひとつをとっても、そこで執り行われる儀礼の種類はさまざま、その一つひとつの来歴、日本に伝来するまでの歴史的経緯は、十分に明らかになつていないものも数多い。ましてや、それが東アジア社会の全体動向のなかで捉えるべき儀礼ともなれば、その変遷を追うとき、日本史の歴史的文脈を観察しただけでは、実態の解明からは程遠いことになる。

そのような「東アジア諸宗教の込み入ったジャングルに

分け入り、それぞれの宗教儀礼の展開の背景と歴史的な変遷と意味を明らかにしていく」という課題意識のもと、編まれたのが本書である。まずは、バラエティに富む本書の紹介から始める。

## 一、本書の構成

本書は四部構成をとり、「I 祖先祭祀と家・国家」「II 儒教儀礼の伝播と変容」「III 追善・鎮魂儀礼と造形」「IV 王権の正統化と宗教儀礼」という章立てになっている。細目には私に丸番号を付して、左に掲出しておく。

### I 祖先祭祀と家・国家

① 東アジアの宗廟祭祀 (井上智勝)

② 中国仏教と祖先祭祀 (荒見泰史)

③ 日本中世の位牌と葬礼・追善 (原田正俊)

④ 近世大名大名墓から読み解く祖先祭祀 (松原典明)

### II 儒教儀礼の伝播と変容

⑤ 日本古代の殯と中国の葬送儀礼 (西本昌弘)

⑥ 日本近世における儒教葬祭儀礼

— 儒者たちの挑戦 — (吾妻重二)

⑦ 『心酬糞選』の中の『朱子家礼』 (三浦國雄)

### III 追善・鎮魂儀礼と造形

⑧ 道教・民間信仰で描く地獄 (二階堂善弘)

⑨ 南宋時代の水陸会と水陸画 (高志緑)

— 史氏一族の水陸会と儀礼的背景 — (長谷洋二)

⑩ 旧竹林寺地藏菩薩像の結縁交名 (長谷洋二)

### IV 王権の正統化と宗教儀礼

⑪ 唐代長安における仏教儀礼 (中田美絵)

⑫ 北宋真宗の泰山・汾陰行幸

— 天地祭祀・多国間関係・蕃客 — (向正樹)

⑬ 皇恩度僧の展開 — 宋〳元代の普度を中心に —

(藤原崇人)

⑭ 法皇院政とその出家儀礼の確立

— 白河院と鳥羽院の出家 — (真木隆行)

各論は儒教・仏教・道教の枠組を取り払っており、相互に連関する部分も多く、必ずしも四つの章立てで区切られる内容には止まっていない。ただ、小テーマを設けて的を絞ることで、諸分野の研究を橋渡しすることとすることで、その点に鑑み、筆者なりの読み方に基づき、稿を進めていきたい。

## 二、本書各論の内容

第一章は、三教の根底にある祖先祭祀に標準を定め、社会や国家との関係から捉えた論考群からなる。①井上論文は、東アジア諸国で広く展開した、統治者の祖先祭祀であ

る宗廟に関する論考である。とくに、原典となった『礼記』が未完成であることもあり、各地域によって宗廟の設け方が異なること、また琉球王国などでは仏教の影響が多分にみられるなどの指摘が興味深い。十九世紀まで「儒教式の祖先祭祀は確立されておらず」（二六頁）という状況が想定されるが、より積極的な理由で仏教式祭祀が選択されたのか否かも気にかかる。

②荒見論文は、葬喪儀礼・追善供養などを通して、在来の民間宗教に新たに仏教や道教が混濁していく過程を、丁寧に解き明かす。葬儀のかたちについては、「殯葬とは距離を保つ仏教よりも、中国社会により近く魂魄や鬼神を祀ることを厭わない道教の役割は大きかったように思える」（五七頁）など、本書のなかで最も包括的な視野から、中国諸宗教の混濁を叙述している。

③原田論文は、儒教から仏教に派生した位牌が、十三世紀末以降に禅宗寺院を中心に公家・武家にも採用され、十五世紀初頭には、近現代と同様の位牌の慣習が確認できるとした。この時期までに広まった位牌が後世にも残ることは、むしろ文化的観点からみて注目に値する。ただし、儒教発祥の位牌が日本に定着する歴史的背景を問題とするにも拘わらず、結論が仏教史の話に収まった感は否めず、さらに神道の霊代への影響まで展望されなかった点は惜し

まれる。

④松原論文は墓塔型式を詳細に分析し、近世大名・家臣の墓型が、中近世移行期には在地性を強く示したものの、十七世紀中葉には当主として正統性の継承を表現するために画一化されたとみる。本論文は祖先祭祀を論じているが、⑩長谷論文と同様に造形という観点に特徴がある。こうした近世大名墓が墓制史上にいかん位置づけがあるのか、たとえば徳川將軍家の墓所や陵墓との比較などがある」と、読み手の理解も一層深まるように思う。

第二章は、儒教儀礼の伝播を中心に諸宗教との影響関係を扱う。とくに⑤西本論文は中国の事例と比較し、八・九世紀日本の殯が、唐礼をふまえた儒教的な性質を有したと指摘する。殯の期間が短縮された原因を、仏式葬儀や火葬の影響ではなく、むしろ殯の中国化・儒教化に求める一方、発哭や仏式道具など喪葬の仏教的要素を見出すなど、従来の議論に対して研ぎ澄ました指摘を加えている。

⑥吾妻・⑦三浦論文は、儒教の葬祭儀礼を祖上における。儒教には、『儀礼』『周礼』『礼記』という三礼文献があり、後に朱熹により新たな儀礼書『家礼』が著わされた。日本近世では後者の方が冠婚葬祭の書物として万人受けしたという。このうち『家礼』に基づく儒教葬祭儀礼の特徴を説いたのが⑥で、祭礼よりも葬礼時の実用的な書礼

礼が重視される点に注目し、『家礼』の近世的変容をみたのが⑦である。

後者によれば、御三家や好学の大名のほか、朱子学以外の儒者の間でも、葬祭のため『家礼』が参照されたという。他方、大名家や林家・儒官を除けば、儒葬は例外的で、儒者の大多数は仏式で葬られたという見方もある。事実、⑥吾妻論文も、仏教批判の先鋒だった熊沢蕃山でさえ、「家礼の儒法を庶人にまで行ん事は、聖賢の君出給ふとも叶ふべからず」と述べた例を紹介している(二七頁)。寺院に設けた儒教様式の墓塔もあわせ、儒仏両様の葬祭の關係性は、より綿密に分析する余地がありそうである。葬祭儀礼の行方を展望する際には、近世後期以降の神葬祭運動の問題も勘案すべきかもしれない。

第三章は絵画・仏像などの造形を素材とした論考群だが、扱う主題は追善・鎮魂などの儀礼が中心である。⑧二階堂論文は、どの時代を対象としているのか分かりにくい<sup>1)</sup>が、道教儀礼で掛けられる十王図や水陸画の神々が、いわば仏教との共同作業で成立したことを説き、⑨高志論文は、このうち現存最古とされる水陸画から、南宋の水陸会儀礼の詳細な復元を試みている。また⑩長谷論文は、旧竹林寺地藏菩薩の結縁交名を再検討して、像の成立時期を絞り、善派仏師の善円は仏師としてではなく結縁者として関

わったとする。葬送・追善儀礼を中心に分析する他の論考に比べ、造形の担い手である興福寺周辺を中心に扱う点に特色がある。

第四章は、中国皇帝や日本の法皇など「王権」の各種宗教儀礼を分析した論考群である。⑪中田論文は、唐の皇帝や宦官と結びつき、対外關係上も重要な長安章敬寺で、長安の孟蘭盆会の際、皇帝代宗の生母を追善する目的で関わった点に注目する。宦官の主導による仏教的な護国活動として催された長安の仏舍利供養は、周辺勢力の弱体化をうけ、外来宗教と結ぶ宦官勢力が排除されるなか、廃仏の打撃を受けたとみる。章敬寺の孟蘭盆会は、⑫荒見論文も安史の乱後の仏教再興の一端とみている(五〇頁)。その点で⑬論文の扱う問題は、単に「王権の正統化」という章構成には収まらない内容にもなっている。

王権の正統化といえば、北宋の太宗趙匡義が、即位に際し黒殺將軍という天神の託宣を喧伝した道教を保護した話がある。同様に、北宋皇帝の天地祭祀儀礼を扱う⑭向論文は、北方の契丹で開かれたそれとは差別化されることで棲み分けられたとみる。同時に、西のウイグル・チベット諸族の使者やイスラム海商の参列・貢物献上を受け入れ、「文化権力」としての体裁を補強したと論じる。なお、首都南郊の郊壇で行う郊祀は、契丹にはない中国式の天の祭

祀だという(二二五頁)。壇上に設けられた昊天上帝・太祖皇帝の神位に供物や音楽が捧げられ、プリンストン大学所蔵『孝教図』には、祭壇の様子も描かれているから、そうした儀礼の場を視覚化する工夫を求めてみたい。

⑬藤原論文は、北宋を中心に契丹・金・元の皇帝が、仏教・道教の童行に特例的に度牒を発給し、広く僧尼を認定する「皇恩度僧」制度のうち、ほぼ無条件に多数の得度を許す「普度」を分析する。史書・石刻資料も駆使し、世宗クビライの主導で催行された、不特定多数の僧尼に度牒と具足戒を与える資戒会など、モンゴル帝国をはじめ為政者が寺院を取り込み、仏教的聖性を身にまとう「菩薩国王」「転輪聖王」として君臨する様子が明らかにされた。とくに女真族も含めた北東アジアの諸政権の実態が紹介されたことは、詳細不明な点が多いなかで貴重な成果といえる。

⑭真木論文は、出家入道を始めた白河院と鳥羽院の「法皇院政」を取り上げる。出家入道(在俗出家)については、近年、日本中世の事例が膨大に蒐集され、これまで以上に緻密な分類が試みられている。それをふまえて⑭真木論文は、白河院と鳥羽院とでは、その出家が「法皇院政」を意図したものか否かで、大きな違いがあると指摘する。

なお、本書では触れていないが、国家との関わりにおいて仏教儀礼だけでなく、儒教の積奠なども看過できない役

割がある。

### 三、本書から攷えるべき論点

#### — 儀礼・思想・地域 —

全体として、本書に収録された各論は緻密で、現在の研究水準を示すことは疑いなく、全体としても読みごたえがある。ただ、本書の副題は「交錯する儒教・仏教・道教」である。三教プラスαの諸宗教の入り組んだ関係を、どのように見ればよいのか、その手がかりを求めて本書を手にする読者もいることだろう。また、⑧二階堂論文が孤軍奮闘し、②荒見論文も中国葬儀における道教の重要性に言及しているが(前述)、バランスという点で道教関係の論述が少なく、本書が描く三教の相関図のかたちを見たかった。むしろ、各論中では、儒仏道のいずれを論じる場合にも、他教との相互関係を意識し、様々な指摘が行われているが、それらの総括や展望が必要となってくる。そこで三つの観点から、本書の成果と課題を考えてみたい。

第一に、儀礼と思想のあいだの問題である。たとえば、宗廟の儀礼は、各国内でさまざまな形態に整備される一方で、その思想的母胎となる『礼記』は体系的に未完成で、その思想解釈は分散していたという。だとすれば、儀礼の整備が先行して、その思想的前提や意味づけが後手に回る



ことがあるのではないか。近世に葬送が「華美化」することとも、同様の文脈として考えられる。

中国の葬儀が仏教的に変容する際にも、「伝統的思想や儀礼の形は何らかの形で残されて」(②五七頁)、儒教葬祭にしても「古礼」への復帰と〈簡便〉との妥協という力学のせめぎ合い」があつた(⑦一四七頁)。これらの指摘を考慮すれば、儒・仏・道の諸宗教が融合するなかで、「形を変えるもの」と「形を残すもの」があらわれる構造や背景は、儀礼と思想の間をみて追究されるべき課題といえる。

また当然ではあるが、儀礼そのものの理解が執筆者によつて異なる場合があり、最も目立つのが、追善・鎮魂という主題をなす水陸会と盂蘭盆会である(⑧⑨)。ともに、施餓鬼会と類似する水陸会と中元普渡(盂蘭盆)の違いが不明瞭で、道教の水陸画の定義も難しいとしつつ、道教の水陸画は「地獄に関する神のものに限られる」とも述べる(⑧一五六頁)。そもそも施餓鬼と盂蘭盆も本来は別物であり、この二つの関係も「実に複雑」(②四五頁)、「水陸会はあまねく亡魂を救済するもので、施餓鬼会に近い」(⑧一五五頁)ともいわれる。他の論考をみても、施餓鬼・盂蘭盆・水陸会の関係づけは三つ巴になっている。餓鬼か、あらゆる亡魂かという、救済対象の範囲から、施餓鬼と水陸会の違いを説明する⑨高志論文が最も端的である(一五八

頁)。

試みに、北宋の呂希哲『歲時雜記』をみると、竹で作つた盂蘭盆の上に、目連尊者の画像を掛け、祭の後に紙銭と共に焼くとあるが、⑨高志論文によれば、水陸会ではそうしたことは行わない。北宋の孟元老『東京夢華錄』巻八をみても、七月十五日の中元節(盂蘭盆会)には、東京開封府で『尊勝經』『目連經』の摺り本が販売され、「目連救母」の演劇が上演されたという。目連画像を用いた盂蘭盆会は、諸尊像を掛ける道教の水陸会とは、似て非なるものとみてよさそうに思う。

仏教史の関心からいえば、度僧制度や出家儀礼など、従来の研究では十分に明らかにされてこなかった宗教儀礼の詳細が解明され(⑬⑭)、今後の進展に大いに資するものである。

寺院に入らずに剃髪し、法体となる世俗の政治権力者や組織の宿老層は、東アジアのなかでも日本の中世に特有の現象である。しかし北東・東アジア諸国には、寺奴になつた伝承をもつ梁の武帝の例は措き、剃髪はせずに大乘菩薩戒は得る、という崇仏の皇帝や国王が君臨した。社会的にも俗体のままで袈裟や宗教的莊嚴を身に着けた政治権力や俗人の様態(居士・優婆塞などの在俗信徒)が存在した。中国日本には、東アジアに通有の居士という形態と、日本独

自の在俗出家という形態の二種類の俗人が存在していた。在俗出家という日本の特異性を理解するには、それとは異なる居士と併せて検証しなくてはならない。<sup>7)</sup> 東アジアの皇帝や国王が、日本と異なり生前出家の功徳を求めなかった事情の分析も同様である。

なお、宗教儀礼が王権の正統を支えるという議論は、従来から多いが、ともすれば王権の内部抗争など微細な政治史に矮小化しかねない。本来の宗教的意義が変質することは別として、宗教や思想の本質を見極める視角を見失わないよう注意を促したい。

第二に、世界観の変化の問題である。なかでも興味深く感じたことの一つが、地獄の問題である。地獄観念は中国仏教・道教の共同作業により生まれたが<sup>⑧</sup>、そうした観念をもたない儒教側は、近世には仏式葬祭を否定したという<sup>⑨</sup>。こうした地獄論が、三教それぞれの方向性をくつきりと浮き彫りにしてくれる点は、示唆深いものがある。三教によって異なる宇宙論というものが、それが当時の人々の世界観に与える影響にも程度差があったのだろう。

ないものねだりの感は否めないが、東アジアの儒・仏・道三教のなかで日本を捉える際、忘れてはならないのが、神道やキリスト教の問題である。日本の神道の問題は、中世前期以降の中世神道説のような言説の展開も重要だが、

その後の展開において重視されるのは、中世後期に成立し、仏教や儒教を理論的に包摂した吉田神道の存在であることは、いうまでもない。とくに大航海時代以降のキリスト教の伝来は、それまでの伝統だった須弥山世界説に基づく三国世界観を揺るがす契機となったと考えられており、先の地獄観にも影響を与えたのではあるまいか。

三教の地獄観の問題も、神道やキリスト教、さらに「天道」思想と複雑に絡むと思われる。三教に神道・キリスト教を加えた諸宗教が並列するなか、俗人や民衆が願望に応じてそれを取捨選択する中世後期の動向も、救済願望と関わる世界観の問題と無関係ではない。それは葬祭に対する三教の態度の違いにも顕れている。

第三に、地域性の捉え方の問題である。本書には示唆的な事実や指摘が多い。たとえば、祖先祭祀が、イエや一国家だけでなく、対外的にも意味をもったという<sup>⑩</sup>向論文の指摘からは、儀礼の立体的な側面を見逃してはならない。大食船主のような海商に、封禅儀礼に参列する利点が認められたのであれば<sup>⑪</sup>二二三頁)、ユーラシア東方や海域の情勢が変動する南宋・元、さらに明代以降の儀礼の行方も、気にかかる部分である。宗教儀礼の内実を、内陸・海域にまたがる広域的な政治・社会情勢のなかで捉える視角を鍛えれば、日本史・宗教史研究の幅も広がるに違いない。

また、十七世紀中葉以降に大名墓の型式が均質化されるなかでも、黄檗宗の影響を示す薩摩藩の亀趺碑が造られたように(④八八頁)、境界領域の地域には、細かな部分で独自性が窺える。

十六世紀以降に日本や中国に伝来したカトリック・キリスト教では、東アジア巡検使ヴァリニャーノのように、現地の宗教・文化に適應することが基本方針となっていた。<sup>⑤</sup>キリスト教に限らず、本書が扱った三教、さらには神道を含めた諸宗教も、布教地域ごとの色に染め分けられる部分が多くあった。

大航海時代がもたらしたキリスト教や海外情報は、それまでの伝統だった須弥山世界説による三国世界観の崩壊を惹起したかもしれない。ただ、こうした東アジアの思想的潮流に与えた衝撃の内にも、右の意味で、宗教も地域性に規定されることを、十分に考慮する必要がある。

本書によって我々は、東アジア諸地域で行われた宗教儀礼の有り様を克明に知るうえで、豊かな成果を得た。漢字文化圏の東アジア諸国において、三教の捉え方、文化や思想を咀嚼する過程が異なることはいうまでもない。これを地域的偏差と呼ぶならば、同じ地域にあつても、時代や世代によって儀礼に対する姿勢や価値観が異なることも当然である。いわゆるグローバル社会も、多種多様な個別ロー

カルの集合体としての側面を抱えている。今後、東アジア社会の儀礼史研究を進める際、そうした地域史研究に近い視野も堅持して個々の研究成果を蓄積し、そこから見える複雑なモザイク模様を分析する眼力まで求められる。そのためには、諸地域の儀礼の比較と検討という、地道な基礎的作業を積み重ね、それこそ「東アジア各国の宗教的個性」(①三〇頁)のカケラを一つずつ拾い集めるしかない。

東アジアの宗教史・儀礼研究は、かかる個別的分析と全体的分析を循環させた、息の長い作業になるだろう。本書はそうした模範と課題を示した研究の一つだと考える。以上、筆者の中国宗教の理解は不十分で、些末な指摘も多い。成稿の遅れと併せ諸賢のご海容を乞いたい。

(1) 森和也『神道・儒教・仏教―江戸思想史のなかの三教―』(ちくま新書、二〇一八年)二六〇頁。

(2) 笠沙雅章『宋元佛教文化史研究』十章(汲古書院、二〇〇〇年)。

(3) 入矢義高・梅原郁訳注『東京夢華録』(岩波書店、一九八三年)三五一―三五六頁。

(4) 平雅行「出家入道と中世社会」・「日本中世における在俗出家について」(『大阪大学大学院文学研究科紀要』五三・五五、二〇一三・二〇一五年)。

(5) 木下光生「近世の葬送と墓制」(勝田至編『日本葬制史』



吉川弘文館、二〇一二年。

(6) 河上麻由子『古代アジア世界の対外交渉と仏教』(山川出版社、二〇一一年)、藤原崇人『契丹仏教史の研究』(法藏館、二〇一五年)。

(7) 拙著『日本中世社会と禪林文芸』(吉川弘文館、二〇一七年)。

(8) 拙稿『中世後期の社会と在俗宗教』(『歴史学研究』九七六、二〇一八年)。

(9) 井手勝美『キリシタン思想史研究序説』(べりかん社、一九九五年)。

(二〇一七年三月刊、勉誠出版、二五六頁 二四〇〇円+税)

西山由理花著

## 『松田正久と政党政治の発展』

——原敬・星亨との連携と競合——

久野 洋

本書は、政党政治家松田正久(一八四五〜一九一四)の政治的軌跡から、近代日本における政党政治の発展過程に迫ったものである。西山由理花氏(以下、著者)が京都大学大

学院法学研究科に二〇一六年に提出した博士論文がもとになっている。まずは各章を要約し、成果と問題点は主として後段でコメントする。

序章「近代日本における政党政治の発展と政治家の責任」は、松田正久を取り上げる意義を述べる。従来、松田を対象とした本格的研究が存在しないこと、それによって政友会内の党人派の位置づけも不十分であることを指摘する。その上で、第一部「松田正久の目指した政党政治のあり方」で中央における松田の政治指導・政治構想を、第二部「松田正久と選挙区佐賀県」で松田と選挙区との関係を検討し、これらを通して近代日本における政党発展を伊藤博文や原敬に注目した研究とは異なる視点から描くことを目指すとする。

第一章「国会開設にむけて」は、議会開設前までに松田が政治家としての素質を磨く過程を追う。小城藩士の家に生まれた松田は、維新後に西周のもとで国際法や外国語を学び、約二年半フランス・スイスに留学し、帰国後も翻訳業に従事する。この過程で西欧の諸制度や政党のあり方に関して理解を深めた。急進化する民権運動とは距離をとったものの、身につけた政治知識を活かす場として初代長崎県会議長に就く。その後東京で『東洋自由新聞』を創刊するなどの活動を展開し、次いで鹿児島高等学校造士館の教